

水道事業の沿革

豊見城は沖縄本島の南西部に位置しているが、水源に乏しく、饒波川、国場川が流れているものの、水道水には活用されていない。住民は水道の給水開始以前は樋川井、共同井戸、天水タンク等を利用し飲料水を確保してきました。

昭和38年は60年ぶりの大干ばつで、ほとんどの井戸も干上がり隣の糸満市の嘉手志川から全職員水運びで飲料水確保に努めたこともあります。

豊見城の水道の始まりは、昭和35年轟川の湧水を水源に、琉球政府補助授業により平良、高嶺地区に簡易水道事業導入で給水開始しました。

昭和37年から昭和40年にかけては米国民政府の高等弁務官資金援助で地下ボーリングにより地下水源を開発。簡易水道事業の導入により、豊見城、上田、瀬長、田頭、座安、与根に給水されました。また、昭和40年には琉球政府補助授業で南部上水道企業団より浄水を受け金良、長堂、長小に上水道の給水開始されました。

昭和42年には琉球水道公社より浄水を受け全域に水道施設整備6カ年計画を樹立。

昭和43年真玉橋より給水開始、昭和52年度には上水道普及率100%の給水、皆なが上水道の恩恵を受けるようになりました。

上水道普及により農村集落は住宅団地等の開発が進み人口は急増、都市化傾向が見られるようになり水道事業も拡張計画をくり返すこととなります。しかし、国、県等の水資源開発の遅れもあって小雨傾向になると隔日断水、時間断水等給水制限を余儀なくされました。

平成6年以降は国、県においてダム、河川取水、海水淡水化施設整備、地下水等の開発が進み安定供給が計られております。

豊見城の水道も第5次拡張計画に入り、計画給水人口5万7千人余り、一日最大総水量24,200m³、目標年次平成19年度としています。平成14年4月には豊見城は市制施行がスタートし、新しい街づくり(豊崎地区を含め)が始まっており、水道の普及率100%というものの、農村部をかかえ施設利用率が低く財政は厳しいものがありますが村民の多様化に答えるため「ふれっしゅ水道計画」を進め、安全で良質(おいしい水)な水道、安定性の高い水道を供給するように事業に取り組み、清掃・豊富・低廉な水を供給していきます。

平成14年3月